

御犬養育村始末

大館欣一



農民文学賞作家初の書きおろし長編

時は犬公方として名高い五代将軍・徳川綱吉の治世。江戸中に御犬様がはびこり、犬囲いには数十万匹。あふれ御犬は近隣の村々で養育金付きの分散飼育。が、将軍の死で生類憐れみの令は廃止。犬どもの扱いと養育金の返納をめぐって村は大混乱！ 武州北野村(所沢市)の御犬騒動と、その顛末を民衆の視点から初めて描いた異色の歴史小説。

御犬養育村始末

大館欣一

著者略歴

大館 欣一（おおだち きんいち）

1934年、埼玉県所沢市に生まれる。

第1回国民文化会議小説賞を受賞（1961年）。

第20回総評文学賞を受賞（1983年）。

第32回農民文学賞を受賞（1989年）。

著書に『ダイヤルは生きている』（労働旬報社）、『総評文学賞作品集』（オリジン出版センター）、『焦熱の街』（市井社）などがある。

現住所——〒359 所沢市西所沢2-11-15

電話0429-25-4547

御犬養育村始末

一九九三年八月三〇日 初版第一刷発行

著者——大館欣一

発行者——福田信夫

発行所——武蔵野書房

国分寺市本多二一九一八

電話〇四二三―二六―〇二〇一／郵便番号一八五

FAX〇四二三―二五―八八六二

郵便振替・東京八一九一―二二九

印刷／ミツワ印刷 製本／三水舎

装幀・杉澤清司

不良本は送料小社負担でお取り換えいたします。

定価二、〇〇〇円（本体価格一、九四二円）

御犬養育村始末

〈目次〉

一、村絵図	5
二、御犬の行列	14
三、御犬毛附帳	35
四、初午祭り	59
五、富士山噴火	72
六、商人の群れ	88
七、綱吉公死亡	102
八、犬役所廃止	115
九、養育金返納	129
十、武州代官所	144
十一、村出入り	158
十二、炎の庭	168

三、名主追放	189
四、旗本の用人	206
五、尾張家鷹場	225
六、囲炉裏端	238
用語の注釈	253
主な参考文献	256
あとがき	257

一、村絵図

武蔵国入間郡山口領北野村（現在、所沢市北野）は、中野御犬役所から御犬養育を命じられていた。犬公方として名高い五代將軍綱吉公の治世であり、世に愚令の呼び声高い生類憐れみの令が繰り返し公布されつづけている時であった。

中野御犬役所（現在、東京都中野区）は、すでに十一万匹を超える御犬様を囲っていたが、爆発的に増え続ける御犬様には、ほとほと手をやいていた。

やむなく川崎村（現在、川崎市）や地元の中野、練馬などにあふれた御犬をあずける破目になった。それでもやまぬ御犬の膨張に、預け先は白布に墨を落としたように広がっていった。

御犬の地方分散飼育は一部に知られてはいるが、その実態はあまり多くの人の知るところとなっていない。

武州北野村の旧家に、二百七十年もの永きにわたって眠り続けていた御犬養育騒動の記録が郷土の史家によって掘り起こされた。

数家から見つけ出された古文書こもんじょはまことに断片的ではあるが、御犬養育が行なわれた事実を如実に物語るものであった。

その北野村に生を受けた私は、記録に目を通すうちに、これらの記録は何事かを秘かに語り伝えようとしていると感じられるようになった。

先人の在りし日々を語り明かしたいと思い立ったが、一つの物語にまとめるには長い月日を要することになった。断片的記録は、いわば点として在るのみだから、残る空間を埋めるのは想像にかわる仕事になった。

ここに登場する人物は他の様々な文書にも現われてくる実在した人がほとんどである。旗本、代官、手代、用人等もまた、生身を引きずって事件にかかずらわった人たちである。

物語は宝永元年（一七〇四年）に始まる。赤穂四十七士が高家、吉良義史を討った科により切腹させられた翌年のことである。

初めに武州入間郡山口領北野について概説しておくこととする。

北野村は武蔵野台地の西南部にあり、狭山丘陵が広大な平地に、まさに消え入らんとする北東の端に位置していた。

『武蔵国郡村誌』によると、

○幅員 東西二十四町四十間、南北二十二町十五間

○地勢 南に狭山山地を負い平坦ならず。運輸不便、南北は林木蔚葱、薪炭乏しからず。

○地味 色赤黄相混じ稲梁（稲と背の高き粟）に適さず。桑、茶、粟、麦に應ず。年々旱に苦し

と、ある。

む

〔ルビは、著者が付したもの〕

また、『新編武蔵風土記稿』は、

北野村は河越（著者注・現在、川越市）の城より西南に当りて四里を隔つ。江戸より行程十里に餘れり。家数二百餘。水田少く陸田多し。天水を以て耕せば、しばしば旱損あり。当所御料（幕府直轄地）私領（旗本知行地）入会^あえる所にて……高札場は五ヶ所あり四は本村一は北野新田にあり……

と記している。

山口領とは武蔵七党の流れをくむ山口氏が、この丘陵に城を構えたためにその名が残っているもので、領とは領地を表わすものではなく、郷というくらいの意味である。山口城は跡形もなく、わずかに土塁の一部を残すのみである。

狭山丘陵は地質学的には、まことに奇妙な形をしている。丘は三本の指を台地に突き出した姿に似ている。台地の中の「島」とも評されている。その丘の最も高い所は、台地より八十尺に及んでいる。丘陵の周辺には沢山のひだがあつて、複雑な地形を形作っている。文学的表現を借りて言えば、渺茫^{びようぼう}たる曠野^{いったい}に一堆の丘が蜿蜒^{えんえん}と横たわる。これが武蔵野の単調さを破って景趣を添えている、ということになる。

今日の所沢西武球場の西側にある山口観世音との間に一本の道がある。この道は西武鉄道狭山湖

線に沿う形で東北に向かっている。この道を東北に向かうと、しばらくして左手に巨大な暗灰色の堤防が見えてくる。三本指を置いた形の北の谷に昭和九年に構築された東京の水がめ・山口貯水池（狭山湖）の堰堤である。水底には上・下勝楽寺村が沈んでいる。ちなみに、その南の谷を区切って造った水がめが村山貯水池（多摩湖）である。

このあたり一帯は今日、桜の名所としてばかりでなく、四季に景勝をめぐる人の群れは途切れることはない。

道をさらにすすむと間もなく一筋の水の乏しい流れに出会う。上流を堰堤にもぎ取られた柳瀬川である。架かっている橋を高橋たかばしという。橋のたもとから眺める堰堤は長さ一キロ、高さ五十メートル余の偉容を誇っている。

高橋を渡り、十字路を北に向かい、丘陵へ登ってゆく、ここはかつて立中坂たちちゅうざかと呼ばれ、道は細く傾斜が急であった。多摩ローム層と呼ばれる地層が表出していて、粘質で滑りやすい。

立中坂を登りきり、丘の頂きから視野に入る、ゆるやかな起伏を持つ村里が武州入間郡北野村である。

丘陵一帯は松の巨木と雑木ぞうきの混じりあった深い森となっていた。

丘を下り、北野村に入ると、地質は少しずつ変わってくる。丘陵のあたりでは表出していたローム層は地中一、二メートルにもぐり込んでしまう。関東ローム層と呼ばれる、厚く広大な粘板は関東平野をゆるやかに東北に向かって地中で傾斜し、常陸国水戸ひたちものくにあたりでは地下三十メートルもの深

さにもぐりこんでいるという。

表土は粒子が細かく、雨に濡れると気味悪いくらいに黒くなった。この土の多くは甲州八ヶ岳によって生成されたものと分析されている。乾くと色褪せ、さらさらになり、冬の空^{から}っ風が吹くと砂塵となって舞い上がって空をつるばみ色に染めた。

北野村は正保年代（一六四四～一六四八年）村高七百余石、内水田二百八十石余、陸田四百二十石余であったが、元禄期には村高八百十石、戸数二百三十戸になっていた。

村の中心に御朱印地五十石を賜る北野天神天満宮があった。北野という村名も、この北野天神からのものであるらしい。広大な神社の境内は杉の古木に幾重にも覆われ、昼なお暗く、冷気が神域に漂っていた。

天神社の南の参道前をほぼ東西に走る村道は江戸道と呼ばれ、所沢と青梅^{おうめ}（現在、東京都青梅市）とを結んでいた。

天神社の西の細い道を登ると、西大門がある。大門を右に見て坂を下ると細い流れに出る。北野川である。流れに沿う狭い田を渡り終えようと、道は再びゆるやかな登りになって、登りつめると風景は一変する。小手指ヶ原^{こてさし}である。今日の西部池袋線の小手指駅のあるあたりである。

小手指ヶ原は元弘三年（一三三三年）五月、新田義貞が鎌倉攻めに際し、迎える北条軍と遭遇し、合戦となった所である。新田、北条合わせて八百騎が討ち死にしたと伝えられる、小手指ヶ原古戦場として名高い。ついでながら西に二キロほどの三ヶ島村金井ヶ原もまた、この時の戦場として知

られている。戦場とするにふさわしい広さがあったということになる。

ここらあたりから河越方面に打ち続く茫漠たる風景を万葉の歌人は、

月のかくるる山もなし

と、歌ったという。

むべなるかな。どこまでも続く平坦な林は、しばしば旅人を悩まし、ことに水の乏しさは、逃げ水という幻影を知覚させたという。この地の者でも陽が落ちて、この林に入ると方角を失い、脱出に困苦し、旦^{あした}を迎えた、といわれるくらいである。

享保七年（一七三二年）の『小手差ヶ原書上帳』によると、次のようになる。

一、武蔵野之内、小手差ヶ原

南北へ五里程

東西へ六里程

一、武蔵野之内、小手指ヶ原

南北江老里半程

東西へ式里程

但し日本橋江九里余

^{まぐさば}
秣場である

秣場というのは田畑の肥料、または牛馬の飼料などの採取を目的とした原野のことで、ここも近

隣の村々の入合いりあひになっていた。

さて、御犬養育が始められた元禄から宝永にかけての北野村は支配が非常に複雑であった。

三人の旗本、花井八三郎、小林勝之助、小林七郎兵衛が知行地ちぎょうちを持っており、それに北野天神社、代官支配地と合わせて五人の支配者が狭い北野村を采地さいちとしていた。年貢を取りたてる土地を采地、または知行地と呼んでいた。万石以上を取る大名の支配地は領地りやうちと分けて呼ばれた。

支配する人を地頭じとうともいった。俚諺りげんにいう、泣く子と地頭には勝てない、という地頭である。

複雑と言っても、どのぐらい複雑であったかを次に見ておくこととする。このややこしさに理解がないと、これからの話が、やたらと不透明になる惧れおそがあるからである。

すなわち、

旗本、花井八三郎、三百三十石。江戸府中、田安御門外に居住。

花井は北野村のうち、自分の支配する百姓を次の三つに分けて管理し、それぞれに名主を任命していた。

上北野村 名主 七兵衛

中北野村 名主 七右衛門

下北野村 名主 伝右衛門

次に、

旗本、小林勝之助 二百四十石。江戸府中、市ヶ谷に居住。

小林勝之助は支配地を一つにまとめていた。

北野村 名主 市郎右衛門

次に、

勝之助の分家、旗本 小林七郎兵衛 百六十石。江戸府中、四谷に居住。

小林七郎兵衛は支配地を二つの村に分けていた。

上北野村 名主 庄左衛門

下北野村 名主 三郎兵衛

さらに、

北野天神社神主、栗原 五十石

天神領 名主 小右衛門

を任命し、天神社東の地続きに居住していた。

さらに、

御料地、武州代官雨宮勘兵衛支配地三十石があった。

この複雑に入り組んだ支配を立証するように、正徳六年（一七二六年）の村絵図を見ると、村内に病葉^{わくは}が落ちたように小林平左衛門知行林、花井庄右衛門知行林、栗原殿屋鋪^{やしき}、花井殿下屋鋪、松平氏下屋鋪などが、あちこちに記入されている。知行林しか記入されていないのは、田畑はまったく記入できないほどに入り組みあっていたからだ、と考えられる。知行林とくらべると百姓林はいく

らない。江戸幕府は、このように江戸に住む旗本たちに知行地を与えていた。旗本たちは知行地から年貢を徴収し、ひたすら消費するだけの生活をしていた。同じ旗本でも給米と称して直接米を受ける者もいた。江戸時代の初・中期は知行地を与えられる者が多かった。

江戸近辺の治安を強化する意味もあったであろうし、情報収集の意図もあったに違いない。それを裏づけるように旗本知行地は関八州に集中しており、江戸近郊は特に密度が高かった。

知行地を与えるといっても、土地にはっきりとした区割を設けて与えるのではなく、百石とか二百石とか、石高で与えたから、事は面倒になった。

百石を与えるとされたら十石生産する農家十戸集めればよい。しかし、それぞれの百姓の生産する力、つまり田畑の所持は、てんでんばらばらである。無高の者から何斗という者、一石、二石半、十石という具合である。そのばらばらな生産力の百姓の持っている田んぼや畑も、あっちに一枚、こっちに三枚と、めちゃくちゃである。

そういう百姓を自分の取り高になるだけ集めるから、またまたこんがらがってくる。

さらに支配者は、年貢などの取り立てがうまくゆくように上北野、下北野などと勝手に名前をつける。そうした村には支配の手先、指先となる名主、年寄、組頭等の村役人を任命した。

支配する側から見れば、北野村は一つの知行地だが、その地に住む者にとっては迷惑この上なかった。どんなに細分化されても住人は地縁、血縁、友情などの太い絆で結ばれていることに変わりはない。他にあまり類例のないほどに支配の入り組んだ村里に御犬様は続々とやってきた。

二、御犬の行列

宝永元年十月。

小春日和の中を奇妙でやかましい行列が岩崎村境を北野村に向かっていた。傾きかけた陽光を正面に受けた行列の男たちは、みな汗と土ぼこりにまみれていた。

男たちは二人一組で御犬様を担いでいた。二本の青竹に戸板を打ちつけ、戸板の上にくず籠をかぶせ、中に御犬様を二匹ずつ入れていた。くず籠というのは、この地方で言う呼び名で、非常に目の荒い籠である。くずっ葉というのは落ち葉のことで、冬場に山の落ち葉を集めて詰めこむための籠である。八本バサミとも言われる。横に太い骨が八本組み込まれている。目が荒いと言ったが、ひとつの目は握り拳が楽に入るほどの大きさである。

くず籠に入れられた御犬様には新しい荒縄が首につけられ、籠の目から外に垂らされていた。御犬様は見も知らぬ男たちに、無理矢理に籠に押し込められた上に、その男たちの肩に担ぎ上げられたのであるから、極度の不安に怯えきっていた。不安から吠えたり、歯をむき出しにして荒れ狂った。担がれて揺すられるために舟酔いをおこし、胃のものを吐き出し、糞をし、小便も洩らした。狂犬のごとく、仲間である二匹は狭い籠の中で喰い合って双方ともに血まみれになっていた。男た